



大容量でありながらもわずか440gと軽量のトートバッグ。エアバッグに使用される耐久性の強い生地を使っており、ショッピングや旅行にも使えます。シンプルでスタイリッシュなデザインが特徴的です。サイズ: H39cm x W55cm x D16cm、ストラップ長55cm、重量440g 参考容量: 約24L ¥11,000 (税込) / 株式会社三栄コーポレーション
TEL: 03-3847-3521

廃車パーツがスタイリッシュバッグに生まれ変わる

あるアメリカのコンサルティング会社の調査によると、10代の4人にひとりが、環境問題意識から行動を変えたという。2017年、ドイツ・ケルンに創業した『AIRPAQ』が提案する自動車文化の新しいカタチは次世代の意識変容の好例となりそうだ。

2024年時点での日本の自動車のリサイクル率は96%に迫り、世界でもトップクラスだ。

よく知られるように、自動車産業というのはその構成部品数の多さ、技術の多様さ、そして社会通念への適合活動など裾野の広い産業だ。日本国内においても自動車産業従事者は550万人以上というから、産業が担う社会責任はあまりに大きい。とくに近年では環境配慮への目に見える形での活動や技術開発などが、企業価値を測る上でも重要なファクターになりつつある。96%のリサイクル率を誇る日本でさえ、その課題は山積の状態だ。

では環境問題意識の高まりは世界共通の認識であるにもかかわらず、いまひとつ目立ったうねりを感じないのは、環境問題への対応がマーケットの善意と義務の意識に頼られすぎているからではないか、との指摘がある。とくにファッション業界では一部の事例を除き「意識の高さとお洒落をしたいという欲求の両方を満たすことは困難」という意見は根強い。理想を言えば、「お洒落や実用性を目的に購入した商品がじつは非常に高い環境意識の基に企画された製品だった」という状況こそが本当の意味での成功事例であるはずだ。

2017年にドイツ・ケルンに創業したバッグブランド「AIRPAQ」はその好例となりそうだ。製品には、

自動車部品工場ではB品となったエアバッグやシートベルト、実際に使用されていたバックルが使われている。従来であれば廃棄される運命にあったエアバッグ生地は洗浄・染色されて、独特の風合いを持ちながら驚くほどの耐久性を誇る。シートベルトは、その丈夫さはもちろん、体に触れる部分の心地よい肌触りまで活かされている。

各パーツの形状が異なるため、製品は一点一点が個性的な表情を持つところもユニーク。とはいえ、たとえばこちらのトートバッグなどはこれが自動車の一部だったとは言われてみるまで気づかれないはず。むしろ目に入ってくるのはスーパーホワイトのハリ感あるナイロンボディの清潔感と、しなやかで肩寄せ感の良さそうなベルト。シンプルなデザインは普段使いからエクササイズバッグとしても使えそうだ。多くを主張しないまでも、製品に隠された素材の長い物語は所有欲を満たしてくれるには十分なうえに、善意という心地よさも常に運んでくれる。

自動車産業で培われた最高級の素材と技術を、サステナブルな形で次の世代に引き継ぐ。AIRPAQの挑戦は、私たちに自動車文化の新しい可能性を示してくれている。自動車への愛着と環境への配慮が見事に調和した、次世代のクラフトマンシップと言えるだろう。



AIRPAQは単なるリサイクルを超えた「アップサイクル」という形で新しい価値を創出している。シグニチャーモデルとも言えるロールトップバックバッグの中央部分にある丸い刺繍は、エアバッグをイメージしたもの。また、ブランドロゴは車のシフトレバーをモチーフにデザインされており、「車の部品」がバッグという日常アイテムに溶け込んでいることがさりげなく伝わる工夫がされている。